滅びの宴

horobi no utage

panic novel

長編小説

西村寿行

Toshiyuki nishimura

滅びの宴

horobi no utage

juko nishimura

西村寿行

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二—一二—一三
(郵便番号112)
光文社　文芸編集部

長編小説　滅びの宴（うたげ）

一九八〇年九月二〇日　初版第一刷発行
一九八〇年一〇月一五日　第四刷発行

著者　西村寿行
発行者　小林武彦
発行所　株式会社光文社
東京都文京区音羽二—一二—一三／郵便番号112
電話　東京(〇三)九四二一二三四一(代)
振替　東京六—一一五三四七
印刷所　堀内印刷
製本所　ナショナル製本
定価　九三〇円

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。© Zyukō Nisimura 1980
0093-92067-2271(0)　Printed in Japan

目次

第一章　跫音（あしおと）　8
第二章　鼠群（そぐん）見ゆ　57
第三章　侵攻　88
第四章　決戦　138
第五章　陽（ひ）は昇る　208

装幀　亀海昌次

扉地図

この地図は国土地理院発行の五万分の一地勢図（八王子）を使用したものである

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

滅びの宴（うたげ）

西村寿行

ひとびとは山野を伐り拓いた。
何千何万年と生きてきた森を裸にした。
自然形態を壊してしまった。
鳥獣は棲み家を失った。
ひとびとはさらに鉄砲で鳥獣を殺す遊びに耽った。
狭い日本列島から鳥獣のほとんどが姿を消した。
樹木を濫伐すると竹笹類が花をつけ、実を結ぶという因果がある。

滅びがはじまった。山野の七割を覆う竹笹類の実は鼠には最高の餌であった。
鼠が急激に増えた。
天敵の鳥獣がいないと鼠は算術的に増える。
ひとびとはたかをくくっていた。

関東山地
秩父山地
八ヶ岳
伊那山地
赤石山脈
身延山地
御坂山地

それらの山地で、鼠は二十億に増えた。
二十億の鼠は人間に牙を剝いた。
鼠群は甲府盆地に進撃を開始した。
人と鼠の凄惨な戦いが繰り拡げられた。
鼠群は人間のおろかさを衝いた。
人間は自身のおろかさに敗れ、山梨県は廃墟と化した。

鼠群は首都を目指して大菩薩嶺に登ってきた。
しかし、そこで鼠群は滅んだ。巨大な群れが必然的に蔵する自壊作用によって、滅んだ。
鼠群は死んだ。
ひとびとは勝利を謳った。
だが、鼠群は眠っただけであった。
ひとびとがふたたびおろかになるのを待って、大菩薩嶺の深みに眠った。
二年前の冬であった。
巨獣の眠った大菩薩嶺に雪が二回、積もった。
陽の塊りが二回、大菩薩嶺を包んだ。
そして、二度目の秋風が吹きはじめていた。

第一章　跫音

1

塔の沢茶屋の庭先から棒ノ嶺が仰げる。
棒ノ嶺、長尾丸山、蕎麦粒山、天目山と、山脈が東西に連なって、秩父山地につづいている。
東京都と埼玉県の境だ。
七月なかばの空は澄んでいた。
沖田広美は、茶屋の庭先から山脈を仰いでいた。宿泊施設のある塔の沢茶屋であった。林道が長尾丸山近くに伸びている。茶屋はその途中にあった。
茶屋には客がいない。
長期休業の貼り紙がある。
沖田広美は、その貼り紙に視線を戻した。
眉が寄っている。白い貌に、いらだちに似たものが浮かんでいた。

――どこも同じだ。
胸中に、そうつぶやいた。
都境一帯はハイキングコースや、登山道が多い。日曜、祭日には数多いハイカーや登山者で賑わうのがつねであった。宿泊施設を持つヒュッテ、山荘、茶屋、小舎などが、多い。厳寒期を除いては、営業は休まないはずであった。
沖田広美は、ここに来るまでに五つの宿泊施設を訪ねていた。どれも、申し合わせたように長期休業の貼り紙をしていた。そして、無人だった。
――何かが、進行しつつある。
それは、わかっていた。
都境から秩父山地一帯にかけて奇妙な噂が拡がりはじめたのは、春が闌けた頃からであった。
最初は、新聞の投書欄に苦情が載った。女性ハイカーからのものだった。その女性は友人と山を歩くのが趣味だった。五月なかばに八丁山にある日原山荘に向かった。だが山荘には長期休業の貼り紙があって、無人だった。
ハイカーや登山者はそうした施設を目標にして、行程を樹てる。休業では、行程が狂ってしまうのである。山の宿泊施設はハイカーや登山者にとっては重要な意味を持つ。
公の事業とはいえないが、ハイカーや登山者にとって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は似た意味を持っているのである。
基地であり、母港であった。
経営者にそのことを心得てほしいと、投書は結んでいた。
その投書の載った二日後に、こんどは別の女性から同じ趣旨の投書があった。
つづいて、二件の投書が載った。
新聞社では放っておけなかった。投書のあった山荘に記者が出向いてみた。やはり、休業している。経営者を捜し当てて、わけを訊いてみた。
経営不振。
理由は簡明であった。諸物価および人件費高騰で、いまの料金ではやっていけない。倍近い値上げをすれば別だがとの答えであった。
その記事が載って、それで終わりになった。
沖田広美がそのことに疑念を抱いたのは、七月に入ってからだった。
沖田広美の疑念というよりは、沖田広美の勤める右川研究所の所長・右川竜造の疑念であった。
右川研究所には夫の沖田克義も勤めていた。勤めるといっても、給料が出るわけではない。所長の右川竜造が緊急課題を抱え込んで設立した研究所であった。沖田夫婦は研究員として手伝っているのだった。

ほかにも三人の研究員がいる。一人は女性で、二人が男性であった。三人とも、理学博士であり、動物生態学者である右川の教え子だった。
ある日、研究員の更科蓉子が昼休みに登山専門誌をめくっていて、最近の秩父山地で拾った怪談の記事をみつけた。
なにげなく読んでみた。三組の登山者の体験談が載っていた。
その一組は、若い男ばかり三人のパーティだった。都境近い山中に天祖神社がある。その近くにウトウの頭山がある。三人の男性は日原川沿いにウトウの頭山に登る途中の河原に野宿していた。
五月の下旬だった。
夕食を終えたのは、五時前であった。まだ明るかった。流木を集めて焚き火をしながら、ウイスキーを飲みはじめた。
夕闇が周辺を包みはじめた頃だった。
どこからか石が飛んできて、テントに当たった。拳大の石だった。最初は、だれかのいたずらだと思った。あるいは野宿しているのを知らずにだれかが投げたものと思った。
交互に大声で、危ないじゃないかと、怒鳴った。
すると、また石が飛んできた。

やめろ、バカ野郎と怒鳴った。怒鳴り終わらないうちに、またもや拳大の石が飛来して、焚き火に落ちた。火の粉が舞い散った。

危険を感じて、三人は繁みに逃げた。どこかに当たればいのち取りになる大きさの石だった

三人の若者は顔色を失っていた。石は三個、飛来した。三個ともそれぞれ別の方角から投げられていた。だてや酔狂の仕業ではなかった。何者かが流れの両側の森に潜んでいるのだ。そして、その何者かは、三人を殺そうとしている。

そうとしか思えなかった。

無言で、気配を窺った。

それっきりだった。山は深閑としていた。

三十分ほどたったが、なんの気配も感じられなかった。

「山男の仕業では、ないのか」

一人の男が、ふるえ声をだした。

「山男?」

「おれの田舎に、そういう伝説がある。昔、惣作という男が、分杭峠といまはいわれている峠に路を開こうと、山に入ったんだ。そしたら、ある夜、大音声が湧き上がった。〈惣作、これでも喰え〉そういう声とともに、何かが小舎に叩きつけられた。みたら、山男の片腕だった……」

「まさか」

その男の声も、ふるえていた。

「しかし、ほかに、何が考えられる?」

反問されて、二人は黙った。

これが崖下なら、石が落ちて来ることはある。だが、ここは河原だ。周りは深い森になっている。それに、三個の石は、三方から投げられた。

「天狗、か……」

「宇宙人では……」

ささやき合う三人を悪寒が包んでいた。

自然現象とは考えられない。拳大の石が三方から一点に飛来するなどという自然現象は、あり得ない。

焚き火が衰えかけている。

「火を、火を燃さなくては……」

火が消えたら何が起こるかわからない。

三人の若者は、うながし合って、繁みを這い出た。焚き火の傍に戻って、流木をくべようとしたところへ、また、石が飛来した。石は飯盒に当たって、潰した。

三人は悲鳴を放った。懐中電灯を摑んで、無我夢中でそこを逃げだした。

怪談の全貌であった。

他の二件も、よく似た体験であった。

「秩父山地の怪」と、タイトルがあった。編集部の註が

ある。山には怪談がつきものだが、そのほとんどが怨霊、幽霊で占められている。理由もなく石を投げるなどというのは、きいたことがない、と。都境一帯から秩父山地はどうかなってしまったのではないかとあった。宿泊施設が一方的な都合で店を閉め、いまではハイカーも登山者も足を踏み込まなくなりつつあると。

更科蓉子は、その記事を、右川竜造にみせた。

右川は黙って、それを読んだ。

読み終えたときには、むずかしい表情になっていた。

右川のつぎに、沖田広美が読んだ。沖田広美は、都境から秩父山地にかけての宿泊施設が店を閉めたとの記事を思いだした。

そのことを右川に告げた。

「秩父山地の、怪か……」

右川は、短くつぶやいた。

数日後の夜、右川は自宅に全員を集めた。

右川の自宅は多摩市の丘陵にある。研究所はその近くにあった。

「秩父山地の怪を、調べてみる必要がある」

右川は最初に、そう述べた。

「どうしてです」

怪訝そうに、沖田克義が訊いた。

怪談を調べたところで、どうなるものではない。恩師の右川竜造の性格は、沖田はよく知っていた。風変わりな発想をする男であった。するどい慧眼の持ち主でもある。風変わりな発想は、その慧眼に裏打ちされていた。

だが、秩父山地の怪は、いただけない。

白髪白髯の右川をみつめた。薄汚れた白髪白髯である。若いときから、身なりを構わない男であった。髪が伸びたら鋏で切り、髯が伸びたらこれも鋏で切る。美醜に関する感覚というのが右川にはない。

痩せている。凹み気味の双眸に沈んだ光がある。それが、重いものに、沖田にはみえる。

二年前。南アルプス、富士五湖周辺、秩父山地一帯から湧き出て甲府盆地を滅ぼしながら大菩薩嶺に攻め登ってきた二十億の鼠群があった。迎え撃ったのは、右川だった。半年前から政府に向かって警鐘を鳴らしつづけたのも右川だった。警鐘は無視された。

そのために無類の惨事が起こった。

二年後のいまも、その後遺症は深い。

右川研究所は鼠群の再来に備えて設置されたものであった。二十億の鼠群は都境にかかる前に、大菩薩嶺一帯で、崩壊現象に襲われて、自滅した。

いや、自滅したものと、思われた。

自然は回復能力を持っている。都市を滅ぼし、おびた

だしい人間を滅ぼした、狂気に支配された二十億の鼠群も、結局、大自然が蔵する回復力には勝てなかった。大自然は鼠群に内部崩壊をもたらし、天敵の鳥獣群を差し向けて、一挙に、潰滅に追い込んだ。

大菩薩嶺一帯は鼠群の死骸の発する腐臭に包まれた。空を翔ける鳥さえ、大菩薩嶺は避けるほどであった。

悲惨な戦いを終えて、右川竜造は、その中に立った。

鼠群は滅びたのではない——右川は累々の死骸の中で、沖田に、そうつぶやいた。

その一言が右川研究所設立につながったのだった。右川は鼠群の潰滅を休眠だと表現した。沖田には、そうは思えなかった。悪魔は潰え去ったものとみた。二度と、あの悪夢が甦ることはないと、みた。

だが、研究所設立は必要であった。

二度と惨事を招かないためにも、鼠禍対策のための地道な研究は必要であった。

そのために、夫婦とも無給で、協力を申し出た。

いまも、悪夢が脳裡に生々しくある。皮膚を染めているといってもよい悪夢だ。それがあるかぎり、沖田は右川に協力するつもりでいた。

大菩薩嶺に立った右川のつぶやきの中に、おそるべきものが含まれているとわかったのは、つい、最近だった。

崩壊現象で潰え去ったはずの鼠群が、二年後になって蘇りはじめた兆候がみえるのだった。

右川の双眸に沈んだ光に重いものを感じるのは、そのためであった。

「わしは、秩父山地での怪現象を載せた雑誌社に連絡を取ってみた。三組のパーティの報告が載っていたが、ほかにも、石を投げられたパーティがないかと、な」

右川の声は低い。

「それで」

「ほかにも、数件、あった」

「やはり、投石ですか……」

「そうだ」

右川は、バーボン・ウイスキーのグラスを把った。

「雑誌社でも、これは何かおかしいのではないかとなって、仲間を集めて調査班を現地に送り込んだそうだ」

「それで、投石は？」

「いや」

右川は、首を左右に振った。

「結局、だれかのいたずらだったのですか」

「ちがうな」右川は言下に否定した。「いたずらで、そんなことはできまい。投石を受けたパーティは雑誌社が連絡を受けただけでも八件ある。それも、同じ場所ではない。東京都境から秩父山地一帯にかけて、かなり広範囲にわたっている。いたずらではない」

「……」
「もちろん、自然現象でもない」
「……」
「秩父山地南部から奥多摩、丹沢方面にかけて、笹の開花が去年、今年と相ついでいる」
「それに、何か、関係が……」
沖田の不審はとれなかった。
二十億の鼠群を生んだ、南アルプス一帯から秩父山地北部にかけての笹類の開花はそれで終わったわけではなかった。引きつづいて、しだいに東に向かっていた。
竹、笹類の開花は三の倍数にあたるという周期説がある。三十年、六十年、百二十年目に開花結実するというのだ。だが、それが正確な周期とはいえない。開花にはさまざまな要因がある。そのもっとも大きい要因は、炭素化合物の相対的増加だといわれている。炭素同化作用が増大するには、日照量が多くなければならない。
森林を伐り払うと、下生えの笹が開花したという例は、諸所にある。開花の周期を迎えていても、日照量が少ないために開花できないでいる場合が多いのだ。
冷雨の多い年には周期を迎えていても開花しない。何年か冷たい夏がつづいた場合も同様である。開花を抑えられている。
暑い夏が到来するのを待っている。何年か暑い年がつづけば、抑えられていた開花が一斉にはじまる。
二十億の鼠群を生むことになった南アルプス一帯の一斉開花が、ここ七、八年間の気候を調べた結果、炭素化合物の増加によるものであることがわかっていた。さらに追い打ちをかけるように開花をうながしたのは、森林の乱開発である。日本の七十パーセントは山林だ。その八十パーセントは笹類に覆われている。森林を伐らなければ笹は日照を得られない。炭素化合物も増大しない。
森林の乱開発は、いたるところで行なわれている。周期を迎えた笹類は乱開発に力を得て、順繰りに開花をはじめていた。その波が東から南に向かいつつあった。
右川の心配はそこにある。
秩父山地南部および、都境一帯から丹沢方面に、笹の開花がはじまっている。さらに、それが静岡方面に南下して拡がる気配をみせていた。
滅びた二十億の鼠群のふたたび蘇る懸念を、右川は抱いている。むろん沖田もその懸念は抱いていた。大菩薩嶺に立った右川が、鼠群は滅びたのではないと洩らしたつぶやきが、現実のものになろうとしている。
悪魔は甦るかもしれない前兆があった。
だが、そのことと、秩父山地の怪がどうつながるのか、沖田にはわからない。
「関係があると、わしは、みる」

「……」
「政府は、今回も、わしの警告を無視しておる。もちろん、無視せねばならん立場もわかる。ふたたび鼠群騒ぎが起こっては、日本は世界に対して面目を失う。失うのは面目だけではない。経済が破綻する。二年前の後遺症は、いまも国民に深い傷口を残している。ここで、政府がわしの警告に乗ってはパニックが起ころう。ようやく下火になりかけたパニックが、火に油をそそいだ恰好になる」
「……」
「山小舎、山荘などの宿泊施設が一斉に長期休業をするというのは、尋常ではない。経営不振などが理由ではあるまい。何か、大きな力が動いている。だれかが、何かを、都境一帯の秩父山地で企んでおるのだ。わしは、そうみる。それを調べねばなるまい。いったい、だれが、何を企んでおるのか……」
右川の目は謎をみつめていた。遠いところにある謎に向けられていた。

沖田広美は、謎めいた右川竜造のそのことばを、思い浮かべていた。
右川研究所は、鼠群の蘇る兆候を迎えて、徹夜に近い研究態勢を敷いていた。

比較的余裕のある沖田広美が調査を命じられたのだった。
調査といっても、二十九歳になるただの人妻である沖田広美には、何をどう調べていいのかわからない。たしかに、二年前には夫の沖田克義とともに二十億の鼠群と戦いはした。しかし、そのせいで、沖田広美は精神を蝕まれてしまっていた。甲府市の潰滅で、暴徒に拉致され、凌辱につぐ凌辱を受けたのだった。心と体の傷は、いまも残っている。
困惑した瞳で、長期休業の貼り紙をみていた。
その瞳が、ふっと、何かをとらえた。
かすかに動いたものが、瞳の隈に入った。

2

動いたものが何かは、わからなかった。
長期休業の貼り紙をみていた視線の隈を、何かの影が横切った。人間であったようにも、動物であったようにも、沖田広美には思えた。
人間がいるわけがないのだった。最初に訪うて、それは確認していた。
沖田広美は山荘に近づいてみた。狸か狐などの小動物が家に入り込んでいるのかもしれないと思った。窓から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com